

二〇二〇年度

沖縄大学 一般入試（前期）

# 「国語」

・ 経法商学部 経法商学科

・ 人文学部 国際コミュニケーション学科

福祉文化学科

こども文化学科

・ 健康栄養学部 管理栄養学科

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章は、在日朝鮮人の詩人・金時鐘（キム・シジョン）が日本統治期の濟州島（現・大韓民国）での少年時代を描いたエッセイです。文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

父の命日は、夏が過ぎれば夏の記憶をかきたててやってくる。ひんぴんと、台風情報もたらされるさ中になることが多い。私から「朝鮮語」がなくなり、親子の語らいが冷えていったのも、確かこの時期の相次ぐ突風のただ中であった。私にはそれが嵐だったとは思ってもよらなかったが、朝鮮で朝鮮語がかき消されるほど、日本語の①叱咤がこまびすしい時代であったので、やはりそれは吹きまわった何かの風ではあつたらう。

【 A 】 利発な私には、それが当然のひびきを奏でる「国語」であった。教科書からは、小学校二年で「朝鮮語」という余分な教科がなくなっていたが、当時すでに、私は②堪能な「国語」の読書力を身につけていた。わけても「つづりかた」と「唱歌」は、幼稚園のときからちやほやされた得意満面の課題であった。「内鮮一体」（日本との合体を謳歌した国策標語）は、私に見る限り最も好ましい進展を見せていた。

それに引き換え、親ときたら、なんとも変わりようがないくらい、(1)新時代からははずれた朝鮮人であつた。日本語を話せない母ならまだしも、読み書きにこと欠かない父、ぎつしり本のつまっている部屋を別に持ち、——私が早くから「トルストイ」という名前を覚えたのも、その部屋の書架に③かざつてあつた大判の、革表紙に金文字がうってある全集からであつた——日本の日刊新聞まで取り寄せて毎日読んでいる人でありながら、なぜか日本語は使わず、洋服も着ない、伸びざかりの私には歯がゆいつつらしい父であつた。それなのに私は、そのような父が大好きであつたばかりか、口数の少ないその父に、侵しがたい威厳すら感じとっていた。にも関わらず、その父の尊厳を損ねていたのは私だったので。(中略)

私は私の日本語でもって、実に多くのことを損ねた。父を見<sup>あやま</sup>過つたばかりか、父に繋がる「朝鮮」の一切を(a)ないがしろにした。「日本語」はそのような形でしか、私に居着くことがなかったからであつた。同じくらいに父の朝鮮語も、あまりにも多くのことを閉ざしたままの言葉であつたから、私を開かせないことで私を損ねた。ひとりっ子の安全を願つてのことであつたと、後日母はしきりととりなしていたが、けだし皇民化教育だけが私を④もうもくにしたのではなかったという事実は、動かない。それだけに権力に取り仕切られる「教育」のもろさとすごさを思い知らされもし、逆に植民地朝鮮の圧政の苛烈さも、⑤寡黙<sup>あやま</sup>だつた父の、喉につかえていた言葉として知ることができると、それが私のうずきであり、祈りである。人並みの知力と才覚をもつてして、日帝時下の長い月日を、

ただ無為に釣り糸を垂らして過さねばならなかった父と、そのような父にひたすら尽くし通した母の⑥しょうがいとが、私の知力のすべてである日本語と朝鮮語を突き動かして止まないものである。

【 B 】教育は人間をつくる。在り方そのものを変えてしまうほど、教育は魔性の力を兼ね具えているものでもある。私を奇形にしたのも教育であり、かろうじて己れを取り戻してきたのもまた、学ぶことを知りだしたことからである。そのいずれにも、教え学ぶことを取り仕切るシステムがあり、その「教育」がある。教育が真実なのではなくて、教育が必要とする「真実」が別にあるだけである。

朝鮮人の私が、朝鮮語を朝鮮で失くしたのは小学校二年のときであった、と先ほど言った。それには「真なること」を学びとる手始めであったわけだが、早くもそれは、朋輩を出し抜く競り合いの始まりでもあったものだった。

週はじめには十枚ずつのカードが配られ、級友同士が目を光らせ合って、「国語」を使わない生徒を摘発し合った。獲物をせしめるすばしこさで、うかつに口を衝いて出る「朝鮮語」に飛びつき、一等速いものがお目当ての「カード」を一枚取り上げるのだ。そのカードは「国語」の成績はもちろんのこと、「修身」「操行」から期末の席次にまで影響が及ぶ特権の「罰券」であった。私はこのスリリングなゲームでも、目立って⑦けんじつなプレーぶりを発揮した。失点は必ずと言っていいほど、その週のうちにカバーしていたので、先生の思召しはこのほか芽出度かった。(後略)

かくして、さしもの「朝鮮語」も口をつぐんだ。生徒同士の規制はようやく日常を取り仕切るまでに「国語常用」を居つかせていたが、学校での談笑は裏はらにこわばるばかりであった。気をつけなくてはものを言えない間柄にあって、どだい言葉のびやかになるはずはないのだ。自分からはよくのことでもない、ものを言っていこうとはしなかった。

「国語」は用心ぶかく、尻ごみがちに引きだされ、カードは行った先で固定した。誰かの失策でも⑧ゆうはつしない限り、もう失地の回復は望むべくもなかった。不意をつく⑨姑息さや、いやがらせがやりだしたのはそれからのことだ。待ち伏せしたり、びっくりさせたり、かまをかけておとしこんだり。とうとう均衡は、⑩きんちようの隙間からほころびだした。大事な「券」をこそげ取られて、

「モツテロヘラ！(勝手にしやがれ！)」

と、やけのやんばちに投げ出してくるのだ。ありったけの「券」をいっときに振る舞ってしまい、あとは好き勝手に、いけない「朝鮮語」を使いつばすのである。なんともふてぶてしい居直りであった。一枚でも元手が減ろうものなら、たちどころに「モツテロヘラ！」となる。惜し気もなく「券」をばらまいて、【 C 】楽しんでるかのようにくずれていくのだった。失くなったはずの「朝鮮語」が一途な私をねじ伏せ、集計自体を⑪滑稽な作業にしまったばかりか「券」を持ちつづけるというまじめな気持をも、何かうしろめたい、気恥ずかしいことに仕立ててしまっていた。もう違反がいくら相次いでも、誰もそれに飛びつこうとはしなかった。それどころか、

「アーナ、カッコカンナ！(やあ、持っていけよ！)」

と、あざけんばかりに束こと差し出されたりもした。(2)私の優良児ぶりはすっかり形なした。屈辱に耐えて、自分の持ち分までも、進んで教卓に積み上げる羽目にまで落ちこんだ。「朝鮮」はやっぱりダメだと、【 D 】思ったものだった。

このような級友達の自堕落さと、いっこうに日本的になつてくれない父との重なりが、新生日本人の私の心をいつも⑫憂鬱にした。「日支事変」もたけなわになり、世は挙げて「非常時」色につつまれ

だしたが、【 E 】父に変化は起きてこなかった。相も変わらぬ周衣トルマキ(外套のような外出着)姿で町を歩き、十年一日、それが人生のような荒磯がよいは朝となく夜となくつづいていた。職もな

ければ働きもしない父こそ、「非国民」呼ばわりされても仕方がない存在であり、事実そのような生き方しかしていない人間であった。(後略)

時節に合わない親を持って、皇国少年の憂愁は深かった。とりわけ好きな父であっただけに、その父が負い目であることがつらかった。植民地朝鮮で、少年達がただ与えられて皇国臣民になったというのは、あれは嘘だ。なるのが当然の私でさえ、天皇陛下の赤子となるには、親と子の心に刺さるせめぎがあったのだ。親を超えなければ「日本人」にはなれなかった小さい魂の喘ぎなど、植民地の歴史をどのように繰ったとこで見えはしまい。背くことでしか真実に近づけなかったのは、努めることがそのまま背理でしかなかった私の、成長とも兼ね合っている「真実」である。しんそこ信じて努めなければこそ、私の「植民地」は根が深いのだ。(後略)

すべてが侵されることでねじれていった愛であった。朝鮮で朝鮮をうとましくさせた教育によって個々人の人格は⑬いやおうもなく失われていき、親子の間にあつてさえ、親子が親子でない関係をつくりだした最たるものに、かつての日本がしかした「朝鮮語廃止」があった。そこに教師がおり、私がいた。彼らには教えることが真実であり、私には学ぶことが真実であった。良い子の私は励んだ。教えられるままに家にまで「国語常用」を持ち込んで、「国語」を知らない母を困らせた。めし、みず、といったたぐいの単語だけを押しつけるのだが、それでも母はおおよそのところを⑭淋しい笑みで間に合わせてくれていた。

しかし父だけはやはり別だった。めったなことでも表情を変えない父が、もろに不愉快さを隠さないようになっていた。短歌や民謡タインガ ノレカクの口ずさみも途切れがちになり、弁当を届けに行ってもあいさつ一つくれないのだ。父と子がただ海を見つめて、何時間となく座り通す夜がつづいた。ろくろく口もきかない状態は本土(光州)の中学に移ってからも同じだったが、たまに寄こしてくれる返信だけは、さすがに達麗な日本語でしたためられてあった。それがまた私の鼻を高くした。

かようにも完成をみていた皇国臣民の私が、朝鮮人に立ち返るきっかけを持ったのはたったひと節の歌からであった。

ネサランア ネサランア おお愛よ、愛よ

ナエサラン クレメンタイン わがいとしのクレメンタインよ

ヌルゲンエビ ホンジャトゴ 老いた父ひとりにして

ヨンヨン アジヨ カツヌニヤ おまえは本当に去ったのか

父のいない突堤で、ひとりで口を衝いて出たのが、この歌だった。八月は終りかけていたが、熱気はどこかで夜が更けてもどよめいていた。徐々に記憶が蘇り、とめどもなくこみ上げてくる涙をしやくり上げながら、私は繰り返し繰り返しこの歌を唄った。

とづくに忘れてしまったはずの歌だったが、歌詞はなくなることもなく心の内に残っていた。釣り糸を垂れる父の膝で、小さいときから父とともに唄って覚えた朝鮮の歌だった。父も母も、つかえた言葉で、振る舞いで、歌に託した心の声で、私に残す生理の言葉を与えてくれていたのだ。ようやく分かりだした父の悲しみが、溢れるように私を洗っていった。

言葉には、抱えたままの伝達があることも、このときようやく知ったのだ。乾上がった土に沁む慈雨のように、言葉は私に朝鮮を蘇らせた。いつときに言葉が私に溢れ、溢れた言葉が渦に解け入り、力づくで代わりの主人を据えようとする軍政へ向けてなだれを打った。(後略)

おお愛よ、いとしのクレメンタインよ!

誰が唄いだして私にまできた歌なのか。(3) どうあろうとこれは私の「朝鮮」の歌だ。父が私にくれた歌であり、私が父に返す祈りの歌なのだ。私の歌。私の言葉。この抱えきれない愛憎のリフレイン――。

(金時鐘「クレメンタインの歌」『金時鐘コレクション8』藤原書店、二〇一八年より。ただし、一部改変した。)

問一 \_\_\_\_\_ 傍線部①から④の漢字にはひらがなで読みをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

問二 【 A 【から】 E 【】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

【 ところが まるで まさしく それでも つくづく 】

問三 (a) ないがしろと類似した言葉には○を、類似していない言葉には×を、それぞれつけなさい。

① 軽んじる ② 葬る ③ 侮る ④ 重んじる

問四 筆者が自分の親のことを(1)新時代からははずれた朝鮮人であったと考えているのはなぜか。文中の言葉を用いながら一〇〇字程度で説明しなさい。

問五 (2) 私の優良児ぶりはすっかり形なしたったのはなぜか。文中の言葉を用いながら一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 筆者は「クレメンタインの歌」を(3) どうあろうとこれは私の「朝鮮」の歌だと述べているが、これに対してどう思うか。あなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。